

2021年11月6日(土)

旧東海道ブラ歩き(10) 芦ノ湖—三島

前回は10月4日に芦ノ湖まで走破していたが、その後家内が足の痛みを訴えたので約一か月回復に努め、今回は前日に箱根ホテルに宿泊して万全を期し朝8時45分に同ホテルを出発した。はじめは晴天、その後曇天、その後雨となってやや苦しい展開となったが、三嶋大社到着直前には雨がやんで一息といったところ。三嶋大社到着は出発から7時間半後の16時15分、境内を少し歩きその近くの店で暫時休憩の後17時24分三島発新幹線で18時半頃帰宅した。歩数は37000歩。総歩行時間およそ7時間。

朝7時に起床、温泉につかる。実に気持ちが良い。7時半からレストランで朝食。コロナが少し下火になったのか、10~15室程度が埋まっている感じ。家族連れ、夫婦、友人同士といった人々が食事を楽しんでいる。我々は簡単な夕食と通常の朝食付きのコースで1泊約4万円。箱根ホテルは湖畔に面して気持ちの良いホテルで、景色も雄大、朝食後庭に出て富士山の写真を撮る(写真1)。ただし富士が見えたのはここが最後で後は曇天で全く富士が見えずこれは期待が外れた。ホテルを出る前に昨日購入したお土産や髭剃りなど不要品を自宅当て宅配便で送り、極力軽装備とする。ホテルを出て15分もするとすぐに箱根峠に登る旧東海道の向坂となる(写真2)。石畳だがこの後歩く静岡県側の石畳に比べると整備が悪くやや歩きにくい。この後赤石坂、風越坂を順調に越え、箱根峠に出る。ここが相模と伊豆の分岐点である。この辺りは伊豆高原の帰りに伊豆スカイラインを走って箱根による時によく通る道だが、歩くのは初めてだ。歩いてみて気づくのは道路は車のためにあって歩行者のためではないと言うことだ。横断歩道もないところが多く、横断は危ないことこの上ない。箱根峠は本来なら眺めが良いはずだが、この頃までには既に曇天となっており、以降三島到着まで一度も富士山を見ることはなかった。ここからは長い下りに入る。

9時52分、函南町桑原というところで国道1号線日本橋から103キロとの標識が立っている。もう100キロも歩いたわけだ。この少し先の旧東海道が数年前の大雨で通行止めとなり現在もそのままのことで、ここは専ら国道を歩く。マスクを外しているのでNOxやCO2を吸い放題だ。10時26分接待茶屋から旧東海道に戻り、小田原攻めに向かう秀吉が兜を置いて休憩したとされる兜石を通過、その1分後には山中城跡・三島宿の標識に到着。この頃までは小生は元気で遅れがちな家内を余裕を持って待つことが多かった。

今回特筆すべきはここまで来る途中で小学生くらいの子供を数人連れた大人という組み合わせで三島方面から箱根を目指して登ってくる元気いっぱいの人たちに何組も出会ったことだ。数組目の時に話しかけたところ全員が横浜の探検クラブの仲間だという。今朝始発の新幹線で三島に着きこれから箱根を越えて湯本まで歩くという。これには驚いた。それより

びっくりしたのは、子供達は全員横浜のある幼稚園の卒業生で、その幼稚園では 5 歳児を引率して同じく三島から湯本まで歩くのが恒例行事で、この日に登ってきた子供達は皆その幼稚園の卒業生なので、今回が 2 回目の挑戦だという。そのうちの一人は今 7 歳だといっていた。こちらが 80 才を過ぎていると言ったら引率の先生からは励まされたが、子供達には想像も出来ない年齢だったらしい。彼らのお爺ちゃんやお婆ちゃんも我々より若いのだと思う。それにしても 5 才児に箱根越えを一日で敢行させるというこの幼稚園は実に良い経験をさせていると思う。慶應幼稚舎では卒業時点で全員が 1000 メートル泳ぐが、これよりも凄い。子供達にこうした経験をさせるのは賛成だ。やれば出来たとの経験こそ人生成功の秘訣だ。

話を戻して、11 時 40 分頃山中城址に到着、北条氏の出城だったが秀吉に半日で落とされたらしい。敷地は実に広大であるが、この頃から何となく歩行に異常が生じたので城址の見学はほんの少しとし、茶屋があったのでおでんで腹ごしらえし、焼きおにぎりを注文して万に備えてリュックに詰めた。ほぼ 30 分ほど休み出発、どうも調子がおかしいので途中芭蕉の句碑があったらしいが歩く方に気を取られていて一向に気づかなかった。

愈々箱根西坂最大の難所こわめし坂だ。あまりの急勾配で背負った米が汗と熱気で蒸され強飯になったという言い伝えがある程だ。ここはそれまでの石畳ではなく人家の間の舗装道路である。しかし流石に急坂でここで小生かなり足をやられ、家内にそれを気づかれるようになる。そこをクリアして再び石畳を歩いて行くと今度は臼転坂が待ち構えている。臼が転がるほどの坂というのが名前の由来だそうだ。14 時 30 分、やっとの思いでこの坂を下った姿が末尾写真 3 である。写真にあるとおり完全に体が後ろに傾いている。今回新しいリュックを使ったのでその影響か或いは急にお腹が出てきたのでその結果かとも思うが、歩いていてどんどん体が後ろに引っ張られるように傾ぎ、後ろに転びそうになる。時々気づいて前屈みになると楽になるのでそうするのだがまた元の体形に戻ってしまう。当然歩行速度も著しく遅くなる。時々国道 1 号線を歩くが、そこでは 1 時間に 1 本三島行きのバスが走っている。家内から **Retire** しても可との話が出るようになるが、どんなに遅くても歩いていれば必ず三島に出るし、つい数日前に購入した「東海道五十三次 八十二才一人旅」という本の著者も何度ももうだめだと思いながら頑張ったとあるので、負けてはいられない。かたくなに歩き続ける。おそらく時速は 2 キロ以下だったと思う。たまに歩いている人がいるとどんどん抜かれていく。

箱根西坂は途中から駿河湾と沼津、三島の景色が遠望でき、本来なら十分これを楽しみながら下山するところだが、なかなかそうはいかない。途中どこか忘れたがスカイウオークという遊園地のような場所を通ったが、後で三島駅に行くタクシーの運転手に聞いたところ、ここは日本最長の吊り橋があり、その途中から駿河湾と富士山の両方が見えるのだそうだ。

生憎白転坂辺りから雨になるが構わず歩き続ける。国道1号線ではすぐ脇を通るトラックの水しぶきを浴びる。**Never give up** と心の中で叫び続ける。この辺りからはなだらかな下りを経て徐々に平地となる。周りは民家が建ち並んでいる。15時過ぎに三島の松並木にさしかかり、15時20分錦田一里塚を通過。ここの標識に日本橋から28里(112キロ)、三島宿まで2キロとあり、漸く元気が出る。この間地図を見るのは専ら家内の役割だ。そこから1キロほど歩くと最後の坂である愛宕坂にさしかかる。この前から体が反っくり返るだけでなく、家内からしきりに右肩が下がっており、ややよぼよぼの爺さんに近いとの指摘を受ける。15時47分にこの坂を下りきったときの写真が写真4である。確かに反っくり返った上に右に傾いている。もう景色もへったくれもない。とにかく完走を目指す。箱根の登りではバテていた家内の方が元気でしきりにいたわってくれる。頭は痛くないか、足はどうかという具合で、一寸気恥ずかしいし残念だ。痛いのは足だけで他に故障は全くない。

幸いなことにその少し前から雨がやみ大分楽になってきた。そこから750メートルほど歩いたところ(地図を見ての目分量の距離)の川に新町橋がかかっており、この橋の上から晴れていれば背後の樹木の上に富士の雄姿が見られるとあり、実際その景色を書いた広重らしき絵も案内板に描かれている。この看板を入れて写真を撮る(写真5)。700メートルを進むのに20分ほどかかったので時速にすると正に2キロだ。三嶋大社まではもうすぐだ。最後の力を振り絞る。16時25分遂に三嶋大社到着。中に入る2段ほどの石段をやっと上り中に入る。ずいぶん立派だ。ここは広重の絵にも描かれているらしい。それにしても芭蕉といい広重といいよく旅行をしたものだと思う。また、旧東海道のあの狭い道を参勤交代の大名が多くての武士を従えて通るといのはいかに大変なことかが身に染みる。構内で若い女性二人連れに写真を撮ってもらい(写真6)、芦ノ湖から歩いてきた、我々の平均年齢は80歳だといったが本当にびっくりしお大事にと言われた。

上記で芦ノ湖―三島の旅は終了。16時半に大社の目の前の売店に入ってコーヒーとワサビソフトクリームを食べて30分ほど休む。確か吉田大兄たちがここで「うなよし」といううなぎ屋でウナギ料理を楽しんだとあったので店で聞いたら既に店の名前が変わっているとのこと。携帯で店を探し電話をしたが誰も応答しない。残念だが三島のウナギは諦め新幹線の駅までタクシーで行き、新幹線で帰宅した。この中では持参した**The Economist**誌を読むつもりでいたが、お酒を飲んでいるうちに着いてしまった。新幹線は速すぎて、旅の楽しみとは無縁だ。

今回は思いのほか足がやられた。新入社員当時三井物産の友人と奥穂高に登ったことがあった(これが生涯でほぼ唯一の登山、後は丹沢のみ)が、その時も奥穂から前穂に降りる途中で足がガクガクになった経験があるが、今度のようにそっくり反って転びそうにはなら

なかった。今後京都までは後数カ所大きな坂があるらしいのでそれまでに下りの歩き方の研究が必要だ。ここからはいちいち東京に帰るわけにもいかないので途中ホテルに泊まって翌日も歩くということになる。次回は三島からどこまで行くのが良いか、家内と検討する。今回のことで大分家内の発言力が増したのが残念な次第である。



写真1 箱根ホテルからの景色 富士もくっきり 写真2 箱根峠に向かう向坂



写真3 白転坂を下り終えたところ

写真4 愛宕坂を下りきったところ



写真5 新町橋の上



写真6 三島大社